

茜色の歌姫



第四部 白村江の戦い



白村江の戦い想像図

春正月の丙申の朔庚申に、御船、還りて那大津に至る。(中略)五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神怒りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近

侍、病みて死れる者衆し。(中略) 秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。
〔『日本書紀』卷第二十六〕

齊明天皇代 額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

〔『万葉集』一卷〕

大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣列れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。(中略) 須臾之際に、官軍敗績ねぬ。水に赴きて溺れ死ぬ者衆し。

〔『日本書紀』卷二十七〕

第五章 瀬田の川浪 663～667

九月。筑紫の那大津。

夜更け、かすかに戸を叩く音に、鏡郎女は問うた。

「誰ぞ」

「紗手奈」

百済に派した紗手奈が、何故、ここに？ 白村江の戦の報せは、いまだ届いていない。

訝しげに戸を開けると、素早く室に入った紗手奈は、膝を突いて拝礼した。髪は乱れ、粗末な賤女の装りで武器は帯びず、埃にまみれた貌を上げると、その両眼から涙が溢れ出た。

「如何した、紗手奈よ」

鏡郎女に両腕をつかまれ、紗手奈はしばし啜り泣いた。

遡ること半年前。

阿倍比羅夫率いる三万の軍とともに百済の周留城に入った紗手奈ら土蜘蛛を出迎えたのは、好奇と憎悪の入り交じった眼差しであった。百済王豊璋への拝謁を済ませ、軍議となった。百済の将たちは、他の大和の将とともに軍議に列席した紗手奈を見やりつつ、不快げに囁き合った。鬼室福信が立ち上がり、阿倍比羅夫に対して問うた。

——何故、女が軍議の席にいる？

比羅夫が応えようとするより早く、豊璋が口を挟んだ。

——將軍よ、大和では、女が軍に加わることもある。

——ここは百済。

鬼室福信は譲らなかつた。

——わが国の作法に従つてもらいたい。

大和の將たちも気色ばんだ。彼等にとつて百済王は、つい先頃、大和の大王から柵を封ぜられた身であり、大和に服属する百済から、権高な物言いをされるのは耐えられない。

だが一方で、大和の將のなかにも、土蜘蛛の參軍を好まぬ者もいた。彼等は黙したまま、だが、非難めいた眼差しを紗手奈に向けていた。

いたたまれず、紗手奈は自ら席を立ち、退出した。

紗手奈が去つた後、阿倍比羅夫は、土蜘蛛の女兵どもを諸処に派し、新羅や唐の後方を攪乱させたいと申し出た。だが、鬼室福信がまたも反対した。

——その任はすでに、私の配下が三年にわたつて行い、十分戦果を挙げている。

頑ななまでに誇り高い鬼室福信は、大和の容喙をなるべく避けようとしていた。百済は百済の民によつて復興すべきであるというのが、彼の信念であつた。ただ、やがて来るべき唐の大軍との決戦のために、しばし百済の地に大和の兵が屯するのはやむを得ない、と考えているようであつた。

百済に侵入した新羅軍との小競り合いが続く中、大和軍は無為のうちに八月となつた。

百済王豊璋と、鬼室福信ら百済の將たちとの間に、軋轢が生まれた。そもそも、鬼室福信らは、豊璋が大和に柵封されるのを望んではいなかつた。豊璋は、百済を大和の風下に立たせるといふ屈辱を味わさせた。そう、公には言わずとも、態度に示した。

その鬼室福信の兵どもが、土蜘蛛と諍いを起こした。酒に酔つた兵が一人の土蜘蛛にしなだれかかり、したたかに股間を蹴られて悶えた。仲間の百済兵どもは激怒して抜劍し、危うく斬り合いになりかけた。

報せは豊璋の耳に入り、鬼室福信の兵どもは罰せられた。鬼室福信はこれを恨み、他の臣や將の前で、豊璋を罵つた。豊璋は、鬼室福信に謹慎を命じ、軍議に加わることを許さなかつた。代わつて、紗手奈を軍議に加えることとした。

その二日後の夜。

陣幕の裡でまどろんでいた紗手奈は、人の気配に眼を覚ました。眠つたさまを装っていると、陣幕に入ってきた男は、短劍を手にしていた。紗手奈の傍らに膝を突き、劍を振り上げた。

紗手奈はすばやく、左手で男の手首を掴み、右手を股間に差し入れ、ふぐりを握り碎いた。男は声もあげずに倒れ臥した。灯りを点じて、紗手奈は呆然となつた。鬼室福信が、白眼を剥き、総身を引きつらせて悶えていた。

輝かしい武勲を樹てた鬼室福信は、一晚、悶え苦しみ抜いて死に、その配下や僚將たちは、大和の女兵どもを悉く殺せ、と喚き騒いだ。

唐の水軍が南下しつあるとの報せが入つてきていた。間近に迫つた唐との大戦の前に、百済王豊璋は、百済の將どもを鎮めるため、紗手奈に大和へ帰るよう命じた。紗手奈は、代わりの

土蜘蛛を將とし、周留城を出た。
だが、紗手奈は還らなかつた。戦の帰趨を見定めてから、百済を離れるつもりであつた。百済の民を装い、その地に留まつた。

そして、白村江で、唐と大和の水軍が対峙するのを、眼のあたりにした。

「紗手奈……」

言葉を失つたように俯く紗手奈に、鏡郎女は、問うた。

「軍（いくさ）の勝敗は？」

「それが……」

紗手奈は、唇を噛みしめた。

「四百の土蜘蛛どもは皆、十数艘の船に乗り、先陣を務めていた」

「四百を悉く、船に乗せたのか？」

「然り」

「愚かな……」

鏡郎女は呻いた。土蜘蛛の武は、諸方に散らせて用いてこそ、威を発する。固めて船に乗せてしまえば、他の兵と同じではないか。

「大和の水軍は七百艘、唐は二百艘。とはいえ、唐の軍船は巨きく速く、漕ぎ寄せれば、遙か頭上から油を浴びせられ、火矢を射かけられ、大和の軍船は次々と燃え沈み……」

「では、土蜘蛛どもは……」

「船ともども焼かれた者、川に落ちて岸から新羅の兵に射られた者、おそらくは皆……」

紗手奈は両手で貌を覆つた。

鏡郎女は、声もなく、宙空を見つめた。

鍛え上げた精銳四百が、悉く……

さらに紗手奈は、大和の水軍が、陣形が整わぬまま、それぞれが勝手に突入し、統制のとれた唐の水軍の前に手も足も出ず、船の半ばが焼かれたこと。その間に新羅の軍が周留城に攻め入つたこと等を、きれぎれに告げた。

「よくぞ還つてきた、紗手奈」

鏡郎女はやつと声を搾り出し、俯く紗手奈の肩を抱いた。

「しばし休め。このこと、誰にも告げるな」

紗手奈は頷き、またも泣き伏した。ひとしきり嗚咽し、やがて去つた。

鏡郎女は、凝然と動かなかつた。

坐した足の下の床が崩れ、深い穴に落ちてゆくようであつた。

鏡郎女が、大和の王宮の裡にて重きを置いていたのは、大王家や豪族どもが、彼女が操る土蜘蛛を畏れていたために他ならない。その土蜘蛛どものほとんどを、鏡郎女は失つた。大和の諸方に散らばる土蜘蛛を集めても、その数は五十に満たない。

大和は、敗れた。百済の滅びも近かろう。そして、鏡郎女はすべてを失つた。

打つべき手立ては思い浮かばず、悲しみも憤りも溢れ出てはこない。身も心も凍り付いたまま、鏡郎女は、彼女の家の梁から人影が消える気配すら、気づかなかつた。

外に出た紗手奈は、背後よりの足音に気づいた。
闇のなかを、静かに迫ってくる。

紗手奈は、歩みを止めぬまま、懐に忍ばせた短剣をまさぐり、足音が止まるのを待った。仕掛
けてくるとすれば、その時。

果たして、足音が止まった。紗手奈は躊躇わず短剣を抜き、振り向いた。
喉が熱く焼けるようであった。口の中に血が溢れた。かすれゆく視界に、女の貌が映った。
安見娘……。

そのまま、紗手奈は絶命した。

仰向けに倒れた紗手奈の喉に深々と刺さった短剣を、安見娘は音も立てずに引き抜き、血を拭
つて鞘に治めた。

背後に手を振った。女どもが四人、闇から姿を現し、紗手奈の屍を運び去った。

それから数日後。

那大津は、百済から逃げ還った大和の将兵で溢れた。続いて、国を追われた百済の将や臣たち。

大和の水軍が白村江で大敗した後、唐と新羅の軍は周留城を陥落させた。諸処で抗い続けていた
百済兵も降伏し、ここに百済は滅亡した。

百済王豊璋が那大津に至った時、浜にはぎつしりと、亡命した百済人の苦屋が並び、千を越え
る老若男女の百済言葉が飛び交っていた。一方で、百済人を見張る大和の兵と、逃れてきた百済

兵との間に諍いは絶えず、時に剣を抜いて殺傷しあった。

「葛城皇子は？」

豊璋は、出迎えた蘇我赤兄に問うた。

「それが……」

赤兄が声を潜めた。

「敗軍の報せに接せられるや、皇子は朝倉宮に遷りたまひ、堅く門を閉ざして出でたまわず……」

「朝倉宮に？」

「然り。唐が攻めてくるとのみ告げたまひ、僅かな舎人とともに……」

豊璋は、唇の端を歪めて僅かに笑った。蘇我赤兄も、それに応えて頷き、言った。

「まずは、磐瀬宮に入りたまえ」

磐瀬宮の大極殿には、蘇我や巨勢、中臣、紀ら主立った豪族が座右に居並んでいた。その奥
に椅子がしつらえてある。やがて奥より現れ、椅子に座った人を見て、豊璋は隣の赤兄に問うた。

「あれは……」

「葛城皇子の御孫、倭皇女」

倭皇女？ あれは木幡という名の、讚良皇女と睦んでいた乙女ではなかったか。

「讚良皇女の行方が知れず、他に葛城皇子の血を引く御子もおわず、十市皇女は未だ籠もりた
もうたまま」

大王家の臨席なしに朝議は開けない。それ故、かつて葛城皇子に打たれた古人皇子の娘である
木幡を、新たに皇女として認めたのだ。もともと、古人皇子こそが、飯豊大王の血を引く正統で

あつた。古人皇子が逆賊として討たれたため、木幡は大王家の一人とされていかなかったが、正閏を問えば、木幡こそが、大王家を継ぐに相応しいとさえ言える。

豊璋は、倭皇女を見つめた。齢は十八。無口で慎ましげな乙女であつたが、居並ぶ豪族どもを前にして、臆する気配もない。まっすぐに貌を上げ、威すら漂っている。

その日の朝議は、豊璋とその一族は磐瀬宮に起居すること、百濟から亡命した臣の棲むべき地を速やかに定めることなどが決せられて終わつた。

「怯えてどうになるものでもあるまい」

朝倉宮は、宝大王が崩御してより、誰も寄りつかず、柵は毀れ、床は塵にまみれ、近くの民が盗み取つたのか、柱や梁がいくつつか、外されていた。

「すでに磐瀬宮では、倭皇女、すなわち古人皇子が娘、木幡を臨席させ、朝議が開かれた。このまま朝倉に籠もつていれば、豪族どもも汝を廃し、別の大王を樹てるべく策を動かすやもしれぬぞ」

葛城皇子は、奥まつた室に独り、舎人どもすら遠ざけ、褥に臥したまま出ようとしない。傍らに坐す鏡郎女は、今日、朝倉宮を訪なつたばかりであつた。

『そもそも倭皇女は、古人皇子を討つた折り、汝が養い育んだ子。今こそ、倭皇女を用い、この窮地を免れるべく、策を講ずるべきではないか』

静かに続ける鏡郎女に、葛城皇子は貌を背け、黙したままであつた。鏡郎女は溜息を吐いた。もはや、この皇子に用はない。三韓を制し、唐をも版図に入れると豪語していた葛城皇子は、

ただ一度の敗北により、やがて唐や新羅が攻めてくるものと決めてかかり、幻に怯えているばかり。

磐瀬の豪族どもは、もはや葛城皇子を大和の政事を称制するものとは見なししていない。朝議は、倭皇女の臨席で開かれ、なんの支障もない。いずれ葛城皇子から天下を奪うとまで言い切つた豊璋王子は、国を失つても、些かの焦燥をも見せてない。今後、どのように動くべく策を練っているか、その心の裡は分からないが。

いずれにせよ、今は下手に動くべきでない、と鏡郎女は意を決した。すでに、諸処に散る土蜘蛛を呼び集めるべく、使いを出した。さらに適当な地で新たな土蜘蛛を育み、機を伺うしかない。

鏡郎女は立ち上がり、軽く拝礼して室を出た。葛城皇子は臥したまま動かず、一度も郎女の貌を見ようとしなかった。

室を出て、宮門をくぐつたとき、不意に気配を感じた。振り向くと、人影はなかった。柵に近い茂みに、誰かが倒れているのに気づいた。用心深く近寄ると、葛城皇子の舎人であつた。喉を掻き切られ、息絶えている。

鏡郎女は、奥の室から宮門まで、誰にも出会わなかつた事に気づいた。葛城皇子の舎人が数人いるはずなのに……。

鏡郎女は踵を返した。再び宮に入り、回廊を走つた。奥の室の戸を開けた。郎女の貌の前に、二つの足がぶらさがつていた。

見上げると、天井の梁から太い縄が垂れ、葛城皇子の首に巻き付いていた。

葛城皇子は眼を見開き、絶命していた。苦しげに貌が歪み、半ば開いた唇から血が垂れていた。

まさか……。

自ら縊くひくるには、あまりに時が少なすぎる。

ふと鏡郎女は手を伸ばし、葛城皇子の股間をまさぐった。ふぐりが、二つとも砕かれていた。ふぐりを砕いて殺すのは、土蜘蛛の技わざ。鏡郎女の知らぬ間に、何故、土蜘蛛が葛城皇子を死なしめたのか。

鏡郎女は再び走った。中庭に飛び出したとき、足音が響き渡り、五十を数える女たちが郎女を囲んだ。いずれも剣を抜いて郎女に擬し、身構えている。

女たちのなかに、その貌を認め、鏡郎女は叫んだ。

「……安見娘」

「久しく」

安見娘は嘲るように笑みを浮かべて拝礼した。

「汝が命どおり、諸処に散った土蜘蛛はすべて、ここに集めた」

すべて、見知った貌であった。鏡郎女が選び、時には手ずから鍛えた女どもが、こちらに剣の切っ先と、憎悪に満ちた面差しを向けている。

「……裏切ったのか、安見娘」

「はて、吾等を謀まはっていたのは、汝ではないか、鏡郎女、否……」

安見娘は、冷やかに言い放った。

「新羅の王女、麗姫」

何故その名を……。

まさか……。

青ざめて立ちつくす鏡郎女に、安見娘は勝ち誇って続けた。

「汝は、如何なるわけか、新羅王家より受けた私恨を晴らすため、葛城皇子と謀って軍を興し、そのため、四百の土蜘蛛は、むなしくかの地で死んだ。否、幾多の和の将兵を死地に赴かしめ、国の倉を傾け、危地に貶めた大逆の罪、磐瀬宮におわす倭皇女をはじめ、大官の方々、さらには百済王家の人々も、これを知る」

そういうことだったのね……。

唐や新羅との戦いに敗れ、百済の地を追われたあなたは、すべての責を私と葛城皇子にかぶせ、口を封じるつもりなのね。三韓出兵を主張してきた豪族どもも、大敗の罪を免れることができる。すべて私と、葛城皇子のせいにしてしまえばいい。

「すなわち、汝を誅せよとは、磐瀬宮の人々の総意」

豊璋ブンシヤン、あなたは私の秘密を彼等に売ることで、大和の一豪族としてこの地に生き残るつもり？

それとも、もつと大きな野望のために、私が邪魔だということ？

「討て！」

殺到する剣を払い、向かい来る土蜘蛛どもを斬り散らし、血路を開いて宮門に向かって、鏡郎女は駆けた。

思い通りにはさせないわよ、豊璋。私は生き延びる、生き延びて、必ずあなたの前に立ちはだかつて見せる。たとえ身一つでも、命さえあれば、必ず報復の機は来るはず。私が味わってきた

修羅、これから味わうであろう修羅、そのすべてを、あなたへの復讐に捧げる。そして、私は必ず作る。

私だけの、理想の国を……。

いつしか鏡郎女は崖に追いつめられていた。崖より数丈下は岩場で、轟々と水が渦巻いていた。背と右膝に矢を受け、さらにおびたらしい刀傷から噴き出した血と、自ら育み育てた女どもを斬った返り血を浴び、鏡郎女の総身を赤く染めていた。もはや歩くことすらできず、片膝を突き、半ば折れた剣を、取り囲む幾十の土蜘蛛どもに向け、喘いでいた。

女どもをかきわけ、安見娘が進み出た。腰に提げた長剣を抜いた。

「死ね、新羅の女怪！」

剣は鋭く鏡郎女の鼻先をかすめた。郎女は、最後の力を振り絞って立ち上がり、さらに胴に打ち込まれた剣を受け止めて跳ね返し、己が剣を横に薙いだ。安見娘の頬が横一文字に切り裂かれ、血が噴き出した。

安見娘は悲鳴を上げ、左の手で貌を覆い、一瞬、構えが崩れた。鏡郎女はすかさず、両手で剣を構え、軀ごと安見娘にぶつけるように、咆哮しつつ突進した。その時、一人の土蜘蛛の放った短剣が、鏡郎女の左の腿に突き刺さった。激痛にまへのめりに突きだした左右の腕めがけ、安見娘は剣を振り下ろした。

鏡郎女の両手が剣を掴んだまま宙を舞い、地に叩きつけられた。切断された両腕から血が迸り、鏡郎女は絶叫してよろばい、崖から真つ逆様に川面へ、激しくぶつかりあう渦の中へと落ちた。

翌日。

磐瀬宮では、朝議が開かれた。

葛城皇子は朝倉宮で縊死……。

「白村江での大敗の責を負いたもうての事であろう」

蘇我赤兄が陳べた。

「とはいえ、今はまだ戦時、唐や新羅が何時、海を越えて攻め来るやもしれず、ここは速やかに喪の儀を行い、新たに大王を樹つるべきなり」

そして、大王となるべき御方こそ……とまで言つて、赤兄は口を嚙んだ。群臣が固唾を呑んで、その名を待つなか、赤兄は言った。

「扶余豊璋」

人々はざわめいた。滅びた百済の王に、何故、大王の御位を継がせるというのか。口々に言い合うなか、ふと、群臣は巨瀬、中臣、紀などの大官が、そろつて口を閉じ、眼を臥せているのに気づいた。すなわち、大官の人々は皆、豊璋が大和の大王となることを、諾している……。となれば、もはや事は決したも同然ではないか。

群臣が静まったのを見計らい、赤兄は続けた。

「そもそも、国史に曰く、かつて飯豊大王、百済王家の連枝にして、やはり百済より吾等蘇我の祖、満智の臣を伴い来たり、大和を開きたもうた。すなわち、百済と大和は、同じ幹より生えし枝。故に百済王家の御子たる扶余豊璋が大王位に即きたもうことに、なんの障りもなし、さらに……」

赤兄は、傍らの木箱を取り上げ、椅子に坐す倭皇女の御前に進み出た。

「ここに、朝倉宮の奥深くに蔵せられし、宝大王の遺詔あり。昨日、中臣の者がこれを見つけ、運びたるものなり」

倭皇女は、箱を開けて紙片を取り出し、広げた。

「百済王家の扶余豊璋を吾が子となし、中大兄皇子の名を授く」

涼やかに読み上げる皇女の声に、群臣はどよめいた。

「即ち」

赤兄は叫んだ。

「扶余豊璋、否、中大兄皇子こそ、その徳、勇、慈悲、威、すべてにおいて正統の大和の大王たるべき御方。これは、亡き宝大王の御遺志である」

赤兄は、豊璋の前に進み出、床に額をつけて拝礼した。

「臣、希う。大和の大王の高御座に昇らせたまえ」

続いて、巨勢が、中臣が、紀が、主立つ大官どもが豊璋の前にひれ伏した。群臣は皆、腰をあげ、大官に倣った。

「中臣鎌子」

大極殿の扉が音を立てて開き、中臣鎌子が小柄な姿を現した。人々の眼差しを浴びつつ、鎌子は、両手を天井に向け、播磨から現れた七枝の剣を捧げ持ち、ゆつくりと歩んだ。

「明神と御宇大和の大王はいづくにありや」

鎌子は大音声張り上げた。

「中臣鎌子、七枝の剣を、大王となりたもう御方に捧げんと、朝倉宮より持て来たり」

大きく掲げられた七枝の剣が、扉から差し込む日の光を浴びて煌いた。

豊璋は立ち上がった。

「吾なり！」

飛鳥。

河辺宮の門前は、続々と詰め掛けた中小の豪族どもによって埋め尽くされていた。

「何故に百済の王を大和の大王位に奉ずるぞ！」

人々は口々にわめいていた。

「鎮まれ、方々！」

大声を張り上げたのは、大伴吹負。いまだ若年、古くは栄えたとはいえ、久しく衰え、朝議に連なることすら許されなくなった大伴の家の出ながら、傍若無人な振る舞いで人の眉を顰めさせつつ、決して憎まれぬ人柄の持ち主であった。

「そもそも、葛城皇子が薨じたまいて後、大王位を継ぐに相応しい御方は、この飛鳥にあり。河辺宮にあり。その御方になんの談合もなく、遠く筑紫の地で百済人を高御座に昇らせることこそ、奇怪なり。相応しき御方の名を知る者は、今ぞ、叫べ！」

大海人皇子！

幾度もその声が、飛鳥じゅうを響かせるばかりに轟いた。

「然り、然り！」

大伴吹負は、大きく頷いた。

「省みれば、三韓に三万の兵を送り、その多くを無為に死なしめた大官どもが罪、万死に値す。唯独り、大海人皇子こそ、三韓出兵に抗いたもうた。吾等は一一致して、次の大王に大海人皇子をこそ、推すべし！」

然り！ 然り！ 沸き立つ群臣どもは、足を踏み鳴らし、手を叩いて賛意を示した。

「出でたまえ、大海人皇子よ！」

そのどよめきは、河辺宮の裡にも響いていた。

だが、河辺宮の門は固く閉ざされたままであった。

「揃えられる兵の数は」

置始比等は、いきりたつ舎人どもを静めるように、穏やかな声音で岡本宮の史の言を伝えた。

「矛を持ったこともない壮丁に甲冑を着せても、老若合わせて、せいぜい一万。すぐに軍に用いられる数は、およそ三千」

一方で、筑紫には、白村江で敗れたとはいえ、百済より還り来った兵が二万余。いずれも三韓や蝦夷での戦を経た精鋭。さらに、多くを焼かれたとはいえ、未だ四百を数える軍船が残っている。瀬戸の海を押し渡り、飛鳥に攻め入れれば、防ぐ術はない。

「とはいえ」

老練な舎人は続けた。

「いつ、唐や新羅が海を越えて攻め来るやもしれず、筑紫に屯する兵をすべて、飛鳥に差し向

けるわけにはゆくまい」

「ならばこそ」

村国男依が身を振るわせつつ叫んだ。

「方々、宮の外のあのどよめきを聞いたであろう」

大海人皇子を呼ぶ声は、いまだ鳴り止みそうにない。

「すみやかに兵を調べ、こちらから軍を仕掛ける手立てもある」

「伊勢にても、濃にても尾にても、大海人皇子をこそ大王に推し奉るとの声は高まりつつあり。

船ならば、吾等、海部も数多く持っている」

伊勢から駆けつけた海部石床も言った。

「機は今、と見るが如何」

舎人どもの多くが頷いた。

「難波より水軍を發し、さらに、吉備や出雲の山づたいに、山人どもを集め、海陸より筑紫を攻めるも面白い」

伊勢の山人を束ねる村本大國が言った。

「面白し」

「面白し」

舎人どもが和するなか、大海人皇子は、眼差しを臥せたまま、黙っていた。

動くべきか……。

動くな。常にそう言われてきた。軽忽しく動かなかったが故の声望であることは、他ならぬ皇

子自らが承知している。

皇子が動くとき、常にその傍らにはいた。

額田郎女が……。

今は、いない。

共に闘う。そう誓い合った。額田郎女がいることで、皇子は動かぬまま、声望を得た。しかし、いまや郎女はいない。郎女は、中大兄皇子と名乗った百済の豊璋のもと……。

額田郎女と離れた己は、かくも無力なのか……。大海人皇子は、その寂しさを表に出すまいと、黙し続けた。

「人々よ」

不意に、室の戸のあたりより声がした。

讚良皇女が、眉根を寄せ、首をかしげ、腕を組んで立っていた。

「さても、常には慧い舍人の方々、門前に集いし人々の声に浮かされ、迷うたか」

舍人どもは不服げに押し黙った。置始比等のみが、柔らかに笑みを浮かべて問うた。

「皇女よ。さては岡本宮の書庫より、なんぞよき策でも見つけたもうたか」

「置始の翁よ、汝はやはり、年ふることに智慧を重ねただけのことはある」

皇女は、手にした書の山を、進み出て床にどんと置いた。

「さらば、舍人の方々、聞け。孫子曰く、彼を知り己を知れば、すなわち、百戦危うからず。方々のうち、まことに筑紫におわす敵を知る者のいるや」

舍人どもは口を噤んだ。讚良は続けた。

「筑紫の地を知り、筑紫の宮の造りを知り、筑紫に屯する兵の備え、津に浮かぶ軍船の作りを知る者のいるや」

舍人どもは、互いの貌を見合い、うつむいた。

「さらに、筑紫の兵と、吾等が集むるべき兵の、劍矛弓矢、さらに甲冑が同じか違うか、知る者のいるや」

「……否」

村国男依が、悔しげに貌を上げた。

「されば皇女よ、吾等は如何すべき」

「孫子曰く、敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の将に非ざるなり」

すなわち……。讚良は叫んだ。

「間を放つべし、諜者を筑紫に派するべし。まず敵を知り、策を練るべし、如何ぞ、皇子よ」

屹と大海人皇子を見据えた讚良に、大海人皇子は領いた。

「さらば」

朴本大國が立ち上がった。

「吾が配下の山人どもを、筑紫に向けて派しよう。上策なり、皇女よ」

人々が手を打った。

「まずは」

置始比等が言った。

「門の前に集いし人々を鎮め、家に還すべし」

舎人どもは立ち上がり、室を出でて、門へと向かった。

大海人皇子と、讃良皇女が残った。

「讃良よ」

皇子は静かに言った。

「よくぞ、鎮めてくれた」

「吾はただ……」

張り詰めていた面差しを悄然とさせ、讃良は呟いた。

「木幡と戦いたくはない……」

木幡……倭皇女が、中大兄皇子こと豊璋の妃となるとの報せが届いたのは、昨夜のことであった。

かつては逆賊として討たれた古人皇子の遺児であったがゆえに、人知れず生きていた倭皇女は、いまや、飯豊大王の正統の末裔として祀り上げられた。いま、新たに大和を統べる者として名乗りをあげた、かつて豊璋王子であった中大兄皇子と、倭皇女の婚いは、百済の生まれゆえに新たな支配者を忌み嫌っていた人々の心を揺り動かさせた。

大海人皇子は、次に筑紫よりもたらされた報せに、より、心をかき乱された。

十市皇女が、中大兄皇子の長子、大友皇子と妻合わせられたまう。

大友皇子は十五歳。中大兄皇子が百済の豊璋王子であったころ、百済の女に産ませたという。父に随って大和に逃れ来たつて後、大友皇子と大和ふうの名に改めた。

吾が娘を……。

報せを聞き、大海人皇子はひそかに呻いた。

かつて、宝大王が数万の民を集めて掘らせた狂心の渠で見た、十一歳の十市郎女の姿が思い出された。

大海人皇子が、額田郎女との間になした十市皇女が、豊璋王子の子の妻となる。とすれば、額

田郎女がそれを許したに他ならない。

郎女は、かの百済人の妻となったのみならず、娘をも差し出したのだ。

まず、舎人どもが騒いだ。それを鎮めると、続いて大伴吹負ら小豪族らが河辺宮に詰めかけた。

「よもや、大海人皇子は、百済人に屈し、皇女を献じたもうたのではあるまいな」

「吾のあずかり知らぬところである。疾う使者を派して確かめさせる」

と告げ、宮に籠もって策を練った。

やがて朴本大国が放った配下の者どもが、筑紫より報せをもたらした。

「西にての、中大兄皇子の声望、決して低からず」

大国は言った。

「また、筑紫や杵岐、対馬に城を築き、軍の備えを緩めぬ一方で、和を結ぶべく使を唐に派したとか。さらに新羅とも、大和は新たに三韓に兵を送らぬかわりに、鉄の権を蘇我や巨勢に譲るべく談合するという」

舎人どもは押し黙った。唐や新羅との和が成れば、中大兄皇子は、いつでも二万の兵を飛鳥に

向けて進めることが出来る。

「いま、筑紫にて政事の要に在るは誰ぞ」

自ら望んで席に列していた讃良皇女が問うた。大国は応えた。

「中臣鎌子」

静かなどよめきが起こった。かつて葛城皇子と共に、豊日大王を排するべく謀った鎌子は、宝大王の復位とともに姿を消していた。それが今や、中大兄皇子の謀臣として、側近く侍っているという。

「鎌子は、かつて土蜘蛛であった安見娘を妻とした」

大国は続けた。白村江で土蜘蛛の多くは討たれたが、残る数十を、安見娘が束ねているという。

「安見娘が？」

かつて、鏡郎女の側に侍っていた安見娘の冷たげな面差しを脳裡に浮かべ、大海人皇子は訝つた。

「鏡郎女ではないのか？」

「鏡郎女は、葛城皇子が薨じたもうた頃より、行方が分からず……」

あるいは、葛城皇子に三韓出兵を勧めた責を負われ、誅殺されたとの噂もある。朴本大国は声を潜めた。

あの鏡郎女が、たやすく誅されようか。大海人皇子は考えを巡らせた。あるいは、安見娘の手で、葛城皇子ともども……。

「ならば」

讃良皇女が問うた。

「額田郎女は何をしている」

舎人どもはそつと大海人皇子を見やった。皇子は眼を伏せ、面差しを動かさない。

「それが……」

大国は首を傾げた。宝大王崩御の後、額田郎女は公の場にいつさい姿を現さず、その動きもつかめない。

「皇子よ」

村国男依が言った。

「額田郎女のおわす所を探り、使を派し、共に策を練られては如何」

大海人皇子は応えなかった。胸が重く塞がれたようであった。郎女が、豊璋王子、すなわち中大兄皇子と情を交わしたことを、舎人どもには伝えていない。

「無用の策ぞ」

讃良皇女が断じた。

「皇子にも諮らず、十市皇女を百濟人の子に妻合わせたは、額田郎女。もはや、額田郎女は敵である」

舎人どもが息を呑み、その眼差しが大海人皇子と讃良皇女との間を行き来した。

讃良皇女は、筑紫から飛鳥に逃げ還つて後、大海人皇子との間に子をなした。草壁皇子と名付けられた赤子は、伊勢の海部に預けてある。讃良皇女が、額田郎女に妬みにも似た思いを懐いていることは、舎人どもも知っている。同じ大海人皇子の子を産んだ母として。あるいは、さらに

昔から……。

とはいえ、額田郎女は、かつては讚良皇女の養いの母であり、筑紫から皇女を逃がしたのも、郎女であった。かつて巫那と呼ばれた乙女の頃より、額田郎女と大海人皇子との間柄を知る村国男依らは、郎女が、未だ皇子に心を寄せ、讚良皇女をも養い子として見ているであろうと、察していた。

されば、筑紫にある額田郎女と気脈を通ずる事が出来れば、如何ほど助けになるか……。舎人どもはそう口にしようとして、憚られた。讚良皇女の憎しみは深く、大海人皇子もまた、黙して語らない。

「いずれにせよ」

重苦しい気を払うように、置始比等が言った。

「まずは兵を調えるべし。いずれ唐や新羅との和が成れば、筑紫が軍を以て吾等を威圧しよう。東の国々からも壮丁を募り、調練して事に備えるべきである。その後の策はいずれ後日に」

「諾」

大海人皇子は静かに頷いた。

年が明けた。

中大兄皇子は筑紫を動かさず、また、大王位にも即かず、称制を続けた。大海人皇子もまた、目立たぬように兵を調えつつも、飛鳥の留守司の務めを淡々と果たした。

夏、唐より劉仁願、郭務悰らが筑紫に派されてきた。百済を制した唐と新羅は、北の高句麗

攻めに取りかかりつつあった。背後より大和の軍に脅かされるのは避けたい。思惑が一致し談合はすらすらと進んだ。冬になって和が成り、劉仁願らは盛大な饗応を受け、唐へと還っていった。そしてまた、年が明けた。

春二月、筑紫より使者が大和に派された。

「淡海の南、大津の地に、筑紫にある三千の百済人を遷り住まわせる」

大津は、大和の北、百二十里（約60キロメートル）、広大な湖である淡海の南端からさらに南に流れる瀬田川を舟で行けば、飛鳥へも難波へも、一日で着く。

「まず、大將軍阿倍比羅夫自ら軍船を率い、千の百済人を越に運ぶ。それより更に陸路で淡海の北に至り、さらに舟で大津へ赴く。留守司らは、よろしく出迎えるよう」

阿倍比羅夫の名に、飛鳥の人々はどよめいた。大將軍自ら大津に出向くとなれば、率いる兵も、少なくとも千や二千は数えよう。

さらに、朴本大國が筑紫に派した者どもから、百艘の軍船が熟田津に向かおうとしているとの報せがもたらされていた。飛鳥は、西の瀬戸と北の淡海から挟撃される形となる。

「諾するなかれ」

小豪族どもも舎人どもも、声を揃えて訴えた、筑紫に逃れてきた百済人は三千を越える。百済の王族や重臣、長年、新羅や唐との戦を重ねた將軍もいる。飛鳥と指呼の地に、新たに百済の国が出来るのも同じであった。

河辺宮の廻りは、軍装を調えた小豪族どもに囲まれた。彼等は篝火を焚き、如何に説こうとも、離れようとはしなかった。

「戦うべし！」

「戦うべし！」

その声は飛鳥じゆうに響き渡り、もはや、押しとどめられるものではなかった。

「戦おうぞ、皇子よ」

讚良皇女も叫んだ。

「いま屈すれば、吾等は大和を、百済人どもに貢ずるも同じ事」

その叫びに、大海人皇子は、静かに讚良皇女を見つめ、声には出さずに問うた。

讚良よ……。汝は木幡と戦いたくないと言った。その汝が、吾に、木幡を妃とする中大兄皇子と戦えと言うのか。

皇子よ……。木幡は、皇子の敵なる中大兄皇子の妃となった。それ故、木幡もまた吾が敵。唇を噛みしめ、眼を臥せ、讚良もまた、無言で応えた。

やがて、千の百済人と、三千の兵を乗せた阿倍比羅夫の軍船百余艘が、越に着いたとの報せが入った。

「大津へ！」

「大津へ！」

河辺宮を囲んでいた兵どもが、一斉に北を目指し始めた。

もはや、戦もやむなし。

大海人皇子は甲冑を着て、河辺宮の門を開けた。皇子の軍装に、人々は歎呼の声を上げた。彼等に担がれるようにして、大海人皇子は大津へと向かった。

陸路を北上した大海人皇子ら四千の軍が、瀬田川の東岸に至ったとき、大津に近い西岸に、阿倍比羅夫の軍が陣を布いているのが見えた。

川幅は三町（約300メートル）、三里（約1.5キロメートル）北に、広々とした淡海が日の光を浴びて煌いている。

「みごとな陣立てよ」

背後の野に全軍をとどめ、舎人どもをのみ随って川岸に近く、馬を駆け寄せた大海人皇子は叫んだ。

数では上回るとは言え、雑然とまとまりのない自軍に比べ、阿倍比羅夫の陣は、整然として堅牢で、その威に気圧されるようであった。

しかも、西岸にはびつしりと小船が並び、さらに淡海の湖面には、阿倍の旗を翻した軍船が浮かんでいた。大海人皇子には、船の備えはない。瀬田川には橋も架かっておらず、こちらから押し攻める事はかなわない。攻め来る敵を待ち受けるしかない。

「今から筏を組み、あるいは安曇の舟を集めるとして、幾日かかると思うぞ」

大海人皇子は、傍らの舎人どもを見やって問うた。安曇は、淡海の湖岸で魚を獲る漁人である。今から彼等を説いたとて、たやすく舟を集められようか……。舎人どもは貌を見合わせ、ややあつて置始比等が口を開いた。

「まず、三日は」

「その間に、対岸の敵が船で漕ぎ寄せれば、如何する？」

「火攻を用いたまえ」

男のように髪を結い上げ、甲冑をつけた讃良皇女が言った。

「河を渡る敵の船に火矢を射かけ、船ごと焼けばよい」

「疾う、火矢と筏、そして船を調べよ」

大海人皇子は命じた。舎人どもが馬に乗り、背後の野に屯する兵どもに向かって駆け去った。やがて、舎人が一人、駆け戻ってきた。

「皇子よ、火矢を調べようにも、矢はあるが、油がない」

さらに一人の舎人が駆けつけた。

「皇子よ、安曇の者ども、すでに比羅夫に随したがい、舟はすべて、比羅夫に供出した」

皇子は齒嚙みした。憤激する人々の勢いに押されて、備えも足らぬまま瀬田までやってきた。軍に馴れた阿倍比羅夫は、なすべきことをすべて調べているはず……。

「皇子よ」

青ざめた面差しで、いま一人、舎人が駆けてきた。

「吾等の背後、六里（約3キロメートル）彼方に、数百の敵兵、見ゆ」

挟まれた……。大海人皇子は、臉を閉じた。周囲の舎人どもは息を呑み、やがておのおの、わめき始めた。背後の自軍の兵どもが騒ぎ始める声が響いてきた。振り返れば、口々におめきあい、狼狽うろたえて右往左往している。

「鎮まれ！」

讃良皇女が叫んだ。

「舎人の方々、豪族どもに伝えよ。吾に策あり、周章すべからず！」

すがるような舎人どもの眼差しを浴びつつ、讃良皇女は声を張り上げた。

「疾う、行け！」

置始比等、村国男依、朴本大国の三人を残し、舎人どもが一斉に自陣に向けて駆け出した。大海人皇子の眼差しに気づき、歩み寄った讃良は呟いた。

「皇子よ、吾に策などない」

見開いた眼が潤んでいた。

「されど……、今は、ああ言わねば……」

讃良は、阿倍比羅夫の軍が越に着いたと知り、真っ先に出兵を言い立てた。手に、書が握り締められていた。孫子の兵法。しかし、幾多の戦いを経てきた阿倍の軍の前に、書でのみ知った兵法は無力であった。そのことを、慧さとしい讃良は、誰よりも悟っていた。悟った上で、己が軽忽を悔いているようであった。

「否」

大海人皇子は囁いた。

「みごとな将ぶりである。汝が傍らにいてくれて、心強い」

讃良は貌を歪め、閉じた臉から涙が零れ落ちた。

そのとき。

「皇子よ」

傍らに残っていた朴本大国が叫んだ。

「皇子よ、舟が一艘、漕ぎ寄せてくる」
見れば、小舟が一艘、川浪をかきわけ、こちらに進んできた。乗っているのはただ独り。自ら櫓を動かしている。軍装ではない。

やがて舟が、中ほどまで進んだとき、眼の大きく大國が叫んだ。

「あれは、女……」

「女？」

「然り……しかも……」

大國は呻いた。

「額田郎女……」

確かに、額田郎女であった。

薄き色の衣に、茜に染めた袴。髪を束ねて後頭部に結んで垂らしている。兵器は帯びず、櫓を巧みに操り、こちらに漕ぎ進んでくる。

「額田郎女とな！」

讚良皇女が叫んだ。叫ぶとともに馬に鞭を当て、岸に向かって駆け始めた。

「待て！」

大海人皇子は叫び、讚良を追った。舎人どもも続いた。

岸より一步（約2メートル）、川に馬を乗り入れた讚良は、弓に矢をつがえ、額田郎女を目掛けて引き絞った。

「よせ、讚良！」

大海人皇子は馬を並べ寄せ、讚良の前をさえぎった。

「皇子を裏切った額田郎女を、何故に庇う！」

讚良はわめいた。

「皇女よ、郎女は皇女が養い母……」

村国男依も馬を寄せた。

「今は敵である。退れ！」

「皇女よ、郎女は、身に兵器を帯びていない」

置始比等が叫んだ。

「あれは恐らく、軍使である。軍使を射れば、敵は必ず攻め寄せて来る」

弓を引き絞ったまま、讚良は動けなかった。今、戦うとなれば、舟を持たず、舟を攻めるべき火矢も調わぬ自軍が不利なことは、讚良も承知している。

「されど！」

讚良は叫んだ。声音が震えていた。

「されど……」

呻いて弓矢を川に落とし、讚良は馬上で貌を手で覆った。

額田郎女は、面差しを変えぬまま、舟を漕ぎ寄せてくる。こちらの岸まで一町（約100メートル）まで寄せて、櫓を止め、碇をおろした。

「置始比等よ」

大海人皇子は言った。

「一艘でよい、疾う舟を調べよ」

「如何される？」

そう問うた老舎人に、皇子は応えた。

「吾が、郎女と話す」

やがて、舟が一艘、南の方よりこちらに漕ぎ寄せてきた。若い漁人が、強張った面差しで、乗り込んだ兵と、対岸の比羅夫の陣を見やりつつ、皇子の前まで漕ぎ、川に降りてひれ伏した。

「あの舟に漕ぎ寄せよ」

皇子は、船底に静かに坐して待つ額田郎女の舟を指差した。

傍らで、馬上の讚良皇女は烈しく啜り泣いていた。

皇子を乗せた舟は、額田郎女の舟に接した。皇子は漁人に、岸まで戻り、合図があるまで待つていよ、と告げ、郎女の舟に飛び乗った。

「皇子よ」

向かい合って船底に座した大海人皇子に、額田郎女は貌を上げた。

「久しく」

やはり、美しい……。

ともに、三十路半ばに近づいている。目尻に、浅く刻まれた皺が、五年の歳月を示していた。

かつて、葛城皇子の謀を逆手に、豊日大王を排して宝大王が復位し、額田郎女は岡本宮に

歌人として召されてから五年、会うことのかなわなかった時があった。有馬皇子が、宝大王への謀叛を企て、大海人皇子を味方につけようと讚良を拉ったとき、額田郎女は自ら、河辺宮に忍んできた。その折の郎女の眼差しは澄んでいた。まっすぐに皇子を見詰めていた。

しかし、今は違う。

郎女の眼は、涙に潤んでいた。眼差しはまともに、皇子を見ていない。

「比羅夫の軍使として来たのか」

皇子はかすれた声で問うた。郎女は頷いた。

「皇子よ」

眼の潤みが消え、郎女はやつとまっすぐに皇子を見た。

「疾う、兵を退かせたまえ」

「何故」

「戦えば、皇子は敗れる」

郎女は眼を伏せて続けた。

「皇子も、それを知っているはず」

「兵を退いて……」

皇子は声を荒げた。

「かの百済人に膝を屈せよと言うのか」

「然り」

「大和を、百済人に貢げよと言うのか」

「然り」

「汝が情を交わした百済人に？」

「皇子よ！」

額田郎女は眼差しを上げた。再び濡れ始めた眼のなかで、瞳が揺れていた。息を喘がせ、郎女は言った。

「吾は、皇子を死なしめたくない」

「かつての夫に」

皇子は、拳を握り締め、わななく声を振り絞った。

「憐れみをかけようとか？」

「否」

郎女は、低く声を押し殺した。

「大和のために」

貌を背けた皇子に、郎女は続けた。

「中大兄皇子もそれを希んでいる。汝とともに、新たな大和を作ること」

「寢屋でそれを聞いたのか」

「然り！」

郎女は、皇子の襟を掴んだ。

「それを聞きたくて、吾はかの皇子の寢屋に忍んだ！」

向き合って語り合っていた額田郎女が、大海人皇子の襟を掴んだのを見た両岸の陣の兵どもが

どよめいた。矢を携えて岸に駆け寄った兵どもを、将たちが押し止めた。

「皇子よ」

額田郎女は、青ざめた面差しで、襟をつかむ拳に力を込めた。

「何故に吾が、かの百済の王子と情を交わしたか、汝は知るや？」

皇子は応えなかった。郎女は語り始めた。

阿倍比羅夫の蝦夷征行きに随行した折、十市皇女が蝦夷の男に姦され、初めて恋うた男童を眼前で殺された事。

そのために、あれだけ朗らかだった十市皇女が、人と会うことすら避けるようになった事。

その苦しみを免れるため、百済の王子に抱かれた事。

「されど……」

額田郎女は、頬に伝う涙を拭いもせず、続けた。

「熟田津に発ちてより四年、一度もかの王子と寢屋を共にしたことはない。王子もまた、強いて吾を求めず、十市皇女を慰めるべく心を砕きたもうた。吾は待っていた。皇子が、吾のもとに來たりて、蝦夷で何が起こったかを問うのを」

郎女は、左右の手で皇子の腕をつかみ、貌を伏せて揺すぶった。

「皇子が、誰より吾と百済の王子の件を聞いたか、知らぬ。されど、皇子は一度でも、吾が真意を確かめようとしたのか」

皇子は応えられなかった。郎女は、涙で鼻を詰まらせながら、叫んだ。

「皇子は……何もしない」

さらに叫んだ。

「吾は戦うてきた、皇子のために。皇子は、吾のために、戦うたことがあるか！」

淡海より滔々と流れ来る水が、小舟を揺らしていた。

川面の光がまぶしく、嗚咽する額田郎女を照らしていた。大海人皇子は黙したまま、震える郎女の肩を見つめていた。心は凍りつき、かける言葉を探したが、浮かばなかった。

……皇子は、何もしていない。

悲痛に放たれた言葉だけが、木霊こだまとなって脳裡に響いていた。

やがて、郎女は貌をあげた。面差しを歪めて笑みを作った。

「吾は戦うたぞ」

両の手で袴を掴み、郎女は言った。

「阿倍比羅夫が、軍を率いてこの地に派せられ、ただ百済人を移すのみならず、皇子をも討ちた
いらげるべしと命ぜられたと聞き、吾は中大兄皇子の寝屋に忍んだ。我が身をまさぐられつつ、
吾は乞うた。大海人皇子は、民の声望も高く、新たな国造りに欠かせぬ人。故に、いたずらに兵
を以て排するのではなく、和を結ぶべし、と」

瞬きもせず見詰める皇子に、郎女は静かに続けた。

「中大兄皇子は言うた。吾が大海人皇子を説くことができれば、兄弟として盟を結び、日継ひつぎの皇
子として迎えよう。皇子を擁して軍を興した輩やからの罪は問わず、むしろ皇子の推す者を、重く取
り立てて官位を授けよう。共に新たな大和を築くべく、和を結ぼうと」

郎女は眼差しを、川面に向けた。

「吾とまぐわいつつ、中大兄皇子はそう言うた。明るる朝、その旨を、阿倍比羅夫に伝えた。皇
子が兵を退けば、すべては治まる」

大海人皇子は、凍りついたように動かなかった。

「皇子よ」

郎女は呟くように言った。

「確かに、伝えたぞ」

大海人皇子を乗せた小舟が再び岸に漕ぎ寄せ、固唾を呑んで見守っていた舍人や小豪族どもが、
一斉に駆け寄ってきた。

「軍を、退く」

皇子は静かに告げた。

「中大兄皇子は……吾等に、ともに新たな大和を築くべく、和を乞うて来た。……吾らは……勝
った」

舍人や小豪族どもが駆け出し、やがて両岸の兵どもが、歓呼の声を上げた。

沸き立つ陣にあつて、讚良皇女は、寂しげに俯く大海人皇子を見詰めていた。皇子の眼差しは、
漕ぎ去った額田郎女の舟が川面に作った航影に注がれていた。

その夜。

陣幕において、大海人皇子は、二十歳になった讚良皇女を抱いた。

「讚良よ」

讚良皇女の胸に貌を埋め、皇子は呻くように言った。

「吾を……離れるな」

「諾」

讚良皇女は、切なげに皇子の頭をかき抱きつつ言った。

「吾は……常に皇子の側にある」

その翌年。

淡海の南端、大津に三千の百済人が移り住み、その地に新たに大和の都を遷すとの詔みことりが、中大兄皇子より発せられた。

大和と和を結び、後方の憂いを除いた新羅と唐は、高句麗への侵攻を開始した。

さらに年が明けて三月。

中大兄皇子は近江に遷り、大和の大王の御位に即ついた。

その年、新羅は高句麗を滅ぼし、三韓を制した。そして、唐と新羅との間に軍いくが始まった。即位した中大兄皇子は、大王おおきみの名を天皇と、大和の国号を日本ひのこと改めた。